孟姜女考

孟姜女考

もうきょうじょこう

有吉佐和子

新潮社版

孟姜女考

昭和四十八年三月五日　印刷
昭和四十八年三月十日　発行

定価　六〇〇円

著者　有吉佐和子

発行者　佐藤亮一

発行所　新潮社

東京都新宿区矢来町七十一

郵便番号　一六二

電話　東京〇三(260)一一一一(大代)

振替　東京　八〇八

印刷　東洋印刷株式会社

製本　株式会社大進堂

落丁・乱丁本はお取替えいたします

©Sawako Ariyoshi Printed in Japan 1973

目次

孟姜女考……5
二代のいけり……75
花浮くプール……149

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.c

孟姜女考

孟姜女考

そのときの暑さは、何年か後になって思い出してもその瞬間にじわりと汗をかいてしまうほど凄いものだった。初夏の爽やかな東京から出かけてきた日本人代表団に、大陸の夏が怪物のように襲いかかって、彼らは一人の例外もなく参ってしまっていた。夜になっても、涼風が立つどころか寒暖計の赤い水銀柱は摂氏四十二度から下らない。団員の中では一番若い会田崎子でも遂に一晩中熟睡できなかった。これでは眠れまいと予想したから、アルコール五五・五度という茅台酒（マオタイチュー）を生（き）のままコップに半分ぐいと呑んで、火のように燃え上ってくる酔いにまぎれてベッドに横たわったのだが、廻しっぱなしにしていた扇風機が夜中に二度も高い台から墜落し、その都度ひどい音をたてたので、起き出してはまた台の上に担ぎ上げるという面倒な作業をしなければならなかった。

扇風機をつけっぱなしにして眠ると死ぬといって幼い頃親から厳しく注意されていたのを思い出しても、この暑い夜に風もないのではその方が命の絶える懼（おそ）れがあるように思えたから、崎子は部屋の隅から紫檀の台をベッドの足許に動かしてきて、その上に重い鉄製の扇風

機を据えつけた。それは全く重く、実に頑丈に出来ていた。紫檀の台の高さは一メートル以上もあったが、扇風機はそこから二度も激しく音たてて墜落しながら、床の上で横倒しになっても平然と廻り続けていた。酔って寝呆けていた崎子の目にも、その扇風機には中華人民共和国の逞しい精神が生きているように見えた。

崎子たちを招待した中国の対外文化協会が作成した盛沢山のスケジュールは、短い期間の旅行に出来るだけ多くのものを見せ、多くの人に接するようにという配慮で詰っていた。北京の一週間は殊の外見るものの多いところだから、朝は九時から夜は宴会の終る八時半まで、寸秒の無駄もない時間割である。この暑さがなければ、それは実に有意義な感謝すべき好意であったのだが、本音を吐けば日本人代表団はその好意の故に唯々諾々としてスケジュール通りに歩いていたのであって、喜びも感激も息を吹き返したのは何週間か後に旅を終えて羽田へ帰り着いてからであった。北京にいる間は、ただもう暑さだけが見え、聞え、そして完全に崎子たちは圧倒されていた。だが招待者の好意の前では、無い力をふりしぼっても酷暑と闘わなければならない。

その日は、いつもより三十分早く集合して八達嶺(はったれい)へ万里の長城を見学に行くことになっていた。食堂で八時に顔を合わせると、どの顔も初老を物語っていて、羽田を出発するときの

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.c

壮年の活気は失われていた。眠れましたか。いや、どうも。私は水風呂に六回入りました。僕は痛飲しましたよ、どうしようもないですからなあ。北京の人たちは平気なのでしょうか。こんな会話の間に誰も「暑い」という言葉を使わなかった。一度でも言えば、それで全員の忍耐が瓦解してしまうと思って誰もが自戒をしていたのではないだろうか。崎子は夜中に扇風機が落ちた話をした。考えてみると船のスクリューも、飛行機のプロペラも、扇風機と同じ形をしているのだから、長く使っていれば扇風機が移動後退するのは理屈だった。高いところから落ちても扇風機が止らなかったと言うと、みんな一様に重々しく頷いたのは、崎子が感じたと同じものを人々も感じたからに違いない。

定刻きっちりにロビーに降りると、接待係の中国人たちはもう待ち受けていた。

「よくお休みになれましたか」

「はい、よく眠りました」

日本側の団長は厳粛な表情で答えた。

五人の日本人のために三台の自動車が用意されてあった。前の二台にそれぞれ日本人二人が通訳一人と文化協会の役員一人と合計四人一組になって乗り組み、団で唯一人の女性である会田崎子は一番最後の車に外文書院という出版社の社員と乗ることになった。

趙秀桂と名乗った彼女は、英語で直接崎子に話しかけてきた。背が高くほっそりした体つきで、髪にはパーマネントをかけ、白いブラウスに青磁色のスカート姿だった。三十歳前後と思われたが、清新な雰囲気の美しいひとであった。挨拶の握手をするとすぐ車に並んで腰を下ろし、出発したのだが、初対面の緊張は却って二人の女を喋りに喋らせた。そのおかげで崎子は趙女士が北京大学の英文科を卒業して、今は出版社で英文中訳や中文英訳をしていること。彼女の父君がかなり高名な学者であるらしいこと。彼女は童話作家をめざしていて、読める限りの世界中の童話を読んでいるが、しかしまだ日本の童話には接したことがない。などと、一通りの知識をすぐ得ることができた。

車はかなりの速度で走っている。開いた窓からは熱風が吹き込んできて、崎子はすぐぐったりしてしまっていたが、趙女士との会話にはそれほど疲れなかった。英語を母国語としない者同士の英会話は、どうせ正確には喋れる筈がないとお互いにタカをくくってしまうから、崎子のような横着者は気が楽なのである。趙女士は淀みもなく話していたが、その文法は英語にも日本語にもない不思議な飛躍を見せることがあった。語彙は崎子より豊かなのだが、明らかに独学の人の陥り易い偏った表現があって、しかしそれが中国人特有の甲高い透きとおるような美声で繰り返されると、まるで詩の朗読を聞いているようである。酷暑の中のド

ライヴの辛さが、この美しい人と同行し、美しい声を聞かされることでどのくらい慰められているか分らなかった。

日本の童話にはどういうものがあるかと趙女士が熱心に聞くので、崎子は「鶴の恩返し」を手短かに話してきかせた。咄嗟には「桃太郎」とどちらがいいかと迷ったのだが、この暑い日中にはせめて雪が大きな主題になっているこの北国の民話でも話していれば凌げるかと思ったのである。

崎子のぶっきら棒な英語で、この民話の味が伝わったかどうかは甚だ疑問であったが、趙女士は大層感動した。

「綺麗なお話ですね。私は好きですわ。日本の童話で英訳されたものはないでしょうか」

「ある筈ですよ。帰ったら探してお送りしましょう」

「是非お願いします。中国語に訳して、日本と中国の友好に役立てましょう。中国人も、今の鶴の物語は大好きです」

崎子は、はっと気付いて質問した。

「中国にも、これに似た民話があるのではありませんか」

「ええ、ありますよ、沢山」

「聊斎志異もそういうものですわね」

日本人が聊斎志異を知っているのが趙女士には意外だったらしく、吃驚して何か言うのを横に、崎子は鶴の恩返しは日本でも秋田から南は九州までの間に同型の話が数カ所できかないほど多く語られているのを思い出し、日本にしかない物語のように得々として話して聞かせたけれども、中国にも当然ある話だったと小さく後悔していた。

崎子が黙りこんだのをどうとったのか趙女士が、

「今度は私が話をする番ですね」

と言い出した。

「聞かせて下さいな、是非」

社交的にすぐ応えたが、崎子の本心はそれほど熱意がなかった。なにしろ暑い。万里の長城というのは、いったい万里の果てにでもあるのだろうか。車は郊外に出てひた走りに走っているのだが、目に映るのは黄色い土と黄色い民家がぎらぎら燃え上るような眩い景色ばかりである。僅かながら横性乱視がかっている崎子の目は、昨夜よく眠っていない為もあって忽ち疲れてきた。初対面の趙女士に失礼とは思ったが、もはや体裁を構っていられないほど目が廻ってきていた。崎子は目を閉じた。そうしていると趙女士の声の美しさ、彼女独自の

英語の言いまわしの美しさが一層はっきりと聞きとれる。崎子は耳を澄ました。だが崎子が、ときどき相槌を打ったり、短い感嘆詞をはさんだりしたのは、話を聞いていることを趙女士に知らせるためであると同時に、ともすれば崎子自身が眠りこみそうになるのを防ぐ為でもあった。趙女士の口調は子守唄にも似ていて、暑さに茹だっている崎子をとろりとろりと誘う。

「モンチャンニュイというのが彼女の名前でした。深窓に育ったので、父親以外の男性を見たことがありません。ある日、庭を逍遙していると、塀の向うから、ちらっと彼女を見たものがあります。モンチャンニュイはかねてから、自分を最初に見た男の妻になろうと思いきめていましたから、男の視線を一条の光のように感じて受けとめてしまったのです。その男は男で、一目モンチャンニュイを見てからというものは心にその面影が匂うように残って、それから幾度か邸の回りを歩きまわった揚句、到頭意を決して門から彼女の家を訪い、彼女の父親に結婚を申し込みました」

鈴を振るような声というのは、趙女士のような声をいうのではないだろうか。中国人の声帯は日本人より高音に相応しく出来ているらしいとは、かねがね思っていたところだけれども、趙女士の声は日本のいかなる声優にも真似手がないと思われるほど高く美しかった。話

しているのは紛うかたなき英語なのだけれども、抑揚はあくまで中国語特有の高低明確なもので、そして不思議な文法と、繊細に使い分ける形容詞の重なりは、崎子をそのまま夢幻の彼方へ運びこむような妖しさを持っていた。モンチャンニュイという名前にはどういう文字を当てはめればいいのか見当がつかなくて、なかなか情が湧かなかったけれども、趙女士の声はやがて崎子に物語の女主人公の清冽なイメージを形造らせていた。

「モンチャンニュイの父親は激しく怒りました」

「え?」

崎子は突然話し手の口調が変ったので、驚いて聞き直した。ひょっとすると、ついまどろんで前の部分を聞き落し、話の脈絡がつかなかったのかもしれない。

「多分、彼女の父親も、世の父親の例外でなく、自分の娘を手放すことが辛かったからでしょうね」

趙女士は優しく微笑しながら補足し、それで崎子はふと趙女士が一人娘であり、独身であり、学者の父君と二人で暮していることを思い出した。新しい中国の結婚は封建色を払拭されたと聞いているけれども、こうした血縁の愛着は変らないのではないだろうか、とも思った。

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.c